

『クニさんが来た』 とびら亭案どーなつ (とびラー7期 安藤淳)

都美をめぐる建築ツアーに現れたかくしゃくとした男性。彼の登場によってツアーは思いもよらぬ展開に…

ガイド 「皆さん、こんにちは～！ とびラーによる建築ツアー、始めますねー。今日9月1日は、1975年に、ここ東京都美術館の新館がオープンした日になります。今日のツアーが、東京都美術館を見て感じていただく時間になればと思っています。安全に楽しんでいただくため、ソーシャルディスタンスを取りながら、進めていきましょう。まわりに気をつけながら、両手を広げてみてください。あっ、そこのお父さんも、両手を広げていただいて…」

老人 「ふん、お前にお父さんと言われる筋合いはない！」

ガイド 「お、お父さん」

老人 「娘は、やらん！」

ガイド 「知りませんよ。娘さん、お会いしたことないですし。すいません、こういう時期なんで、お願いします。お子さんも、やってるので」

少年 「そうだよ、僕だって、やってるんだ～。ねえねえ、変なおじいちゃんも一緒に」

老人 「しかたがないなあ」

ガイド 「ちょっとお、子どもの言うことは聞くんだ…」

ガイド 「はい、じゃあ、ソーシャルディスタンスを取りながら、出発しまーす。お父さんも行きますよ」

老人 「だから、お前に、お父さんと」

ガイド 「分かりました。では、お名前、なんて、お呼びしたら」

老人 「ふん、クニさんとでも呼んでもらおうか」

少年 「ええ、お爺ちゃん、ニクさんって言うんだ」

老人 「クニさんだぞー。まあでも、ニクさんでも、かまわんぞ、少年」

ガイド 「では、ニクさんも参りますよ！」

老人 「お前は言うんじゃない！ なんだったら、クニ様と呼べ」

ガイド 「な、なんで、ですか…」

少年 「ガイドのとびラーさん、ここは何階？」

ガイド 「ボクは、何階だと思う？」

少年 「さっき、エスカレーターを降りてきたから…地下かな～」

ガイド 「そうだね。ここは、ロビー階って言って、地下1階にあたるんだ。東京都美術館は建物の60%が地下に埋まってるんだよ」

少年 「ねえねえ、ニクさん！ ここはいっぱい、地下に埋まってるんだって！」

老人 「ほう、そうなのか！ 詳しいな、少年」

ガイド 「クニさん、そうなんですよ。この設計にした理由っていうのが」

老人 「うるさい！ そんなことは知っておる」

ガイド 「なんで、俺にだけ、厳しいの？」

ガイド 「じゃあ皆さん、これから美術館全体を眺めることできる場所に、ご案内しますね」

ガイド 「はい、着きました。外が見えるガラス窓の方に進んでください」

少年 「わー、入口にあったおっきな銀のボールが見える～」

ガイド 「じゃあ、ここで、いきなりですが、都美建築クイズ。ここ東京都美術館を設計した前川國男は、建築家にならなかつたら、何になりたかったでしょう？ 3択で行きますね。1番、オペラ歌手」



東京都美術館 × 東京藝術大学
とびらプロジェクト

みんなで作る！とびらくご
〈たてもの・野外彫刻 編〉

老人 「いや、ペンキ屋だ！ どうだ？」

ガイド 「クニさん、出してない選択肢を言うの、やめてください」

老人 「ペンキ屋だ！ファイナル前川だ！」

ガイド 「なんですか、それ？ ファイナルアンサーじゃないんですから、勝手に言葉、つくらないでください」

少年 「ねえねえ、ガイドのとびラーさん、正解は？」

ガイド 「正解は、ペンキ屋さんです」

少年 「わー、クニさん、正解だ〜！ すごーい」

ガイド 「じゃあ、皆さん、振り返っていただくと、壁の色は何色ですか？」

少年 「赤、真っ赤〜」

ガイド 「そうですね。ペンキ屋さんになりたかった前川國男は、色へのこだわりがすごくあったので、壁とか案内サインには、赤とか緑とか黄色とか、とっても鮮やかな色が使われてるんです」

老人 「これはな、ワシが塗らせたんじゃ！ ハハハ」

ガイド 「クニさん、そういうの、やめてください。皆さんも、信じちゃ、ダメですよ〜」

ガイド 「じゃあ、今度は東京都美術館の顔、入口を見に行きますよー」

ガイド 「はい。ここは、来場された方が、必ず通る場所なんですけど、皆さん、何か気づいたことは、ありますか〜？」

少年 「はいはい、とびラーのお兄さん。なんか、建物に囲まれてるのに、空がすごく大きい」

ガイド 「そうですね、ここは前川國男が、中庭のような感覚で歩いてもらえるよう作ったスペースなんです」

老人 「ちょっと、ちょっと、ガイドのとびラー君」

ガイド 「あっ、クニさん、なんですか？」

老人 「君は、この東京都美術館のことが大好きみたいだし、わしのこともよく、勉強しておる」

ガイド 「いや、クニさんのことは全然、知りませんけど」

老人 「ま、さておき、建築なんて、使われて、そこにあり続けることに価値がある。だから、いちいち説明など、いらん。最初に君が言ったように、見て感じてもらう、そんな建築ツアーで、わしはいいと思うぞ。偉そうにウンチクなど、たれていたら、叱りつけてやろうと思ったが…そんな必要はなさそうだな。この9月1日、開館日に君と会えて良かったよ」

ガイド 「ク、クニさん…」

少年 「あっ、とびラーさん、ライトがついたよ！」

ガイド 「クニさん、ちょっと、すいません」

少年 「さっきのカラフルな壁にライトがあたって、すっごく、きれい」

ガイド 「うん、この時間の美術館、お兄さんもすっごく好きなんだ。みんなと離れちゃったから、みんなのそこ、もどろっか」

少年 「あっ、名札が落ちてる。えーっと、…とびラーさん、これ、なんて読むの？」

ガイド 「えーとっ。前川に、難しい漢字の国だから、國男。えっ、前川國男？ しかも名札に、東京都美術館新館開館式典って書いてある」

少年 「ねえ、とびラーさん。ニクさんが、いないよ」

ガイド 「ほんとだね」

少年 「とびラーさん、さっき、ニクさんとなに話してたの？」

ガイド 「いや、君と会えて良かったって。…そっか、もしかしたら、クニさん、いや、前川國男先生、わざわざ、この開館日に今の都美がどうなっているのか？ 見に来てくれたのかもね。なんだよ、ニクいな、クニさん」

『ゴロゴロ』 とびら亭馬かんす (とびらー8期 細谷リノ)

三十五年間動けなかったマイスカイホールの願いとは？それは叶うのか？

のぼり坂、下り坂、まさかって言いますが。

まさかアラフィフになって落語作ってご披露するなんて思っていませんでした。

とびらプロジェクト、無茶ぶりがすごい。

無茶ぶりといえば、ここ、東京都美術館でこんな体験をした男もいたようで...

男 「今日の展覧会も混んでたねー。カフェで一息ついたら帰ろっと」

「おや、珍しくでっかいパチンコ玉の周りに人がいないぞ。来るたび気になっていたんだよ。正門(せいもん)通ったら、私がここの主(あるじ)です、って感じでドーンと構えていて」

「ふーん《マイスカイボール 85-2 (はちじゅうごのに) 光と影》っていうのか」

マイスカイホール 「(子供のように高い声)ボールではない。ホールじゃ」

男 「こんな下の方に穴があいてる。ちょっと寝っ転がって覗いてみよっ」

「へー反対側の穴から空が見えるのか」

マイスカイホール 「そこの男。なぜ寝ている？」

男 「すみません、今動きます」

マイスカイホール 「動くのはそちではない。我じゃ」

男 「我？我って誰？」

マイスカイホール 「我じゃ。そちの目の前にいるマイスカイホールじゃ」



東京都美術館 × 東京藝術大学

とびらプロジェクト

みんなで作る！とびらくご

<たてもの・野外彫刻 編>

男 「へっ？マイスカイボール？この巨大パチンコ玉？」

男 「いやいや、喋るわけないから。空耳空耳。疲れてんのかな俺」

マイスカイホール 「我の名はマイスカイホールじゃ。空耳ではないぞ」

男 「(驚いて)ひええー」

マイスカイホール 「驚くな。私の願いを叶えてほしいだけなのじゃ」

男 「願い？」

マイスカイホール 「我はここに35年もいて、飽き飽きしておる。多くの人間が何時間も並んでまで見るという展覧会なるものが見たいのじゃ」

男 「(普通に戻って)たいしたことないですよ～。人の後頭部しか見えないし」

マイスカイホール 「(ちょっとキレ気味に)そちの感想など聞いておらん！我は動きたいのじゃ。展覧会が見たいのじゃ！」

「助けてくれぬならば、私の穴の中に閉じ込めるぞ！」

男 「困ったなあ。で、俺に何をしろと」

マイスカイホール 「押すのじゃ」

男 「は？」

マイスカイホール 「我を押すのじゃ」

男 「それなら簡単。よいしょ。動かないっす」

マイスカイホール 「もう少し上を、力を入れて」

男 「こんな感じ？うーん」

(マイスカイホールの転がる音) [ごろ]

マイスカイホール「おお、その調子ぞ！」

男 「そーれ」

(マイスカイホールの転がる音) [ごろごろ]

男 「おっ、ボールだけに転がるねえ」

「ヤバっ、このままだと動物園に行っちゃうよ」

マイスカイホール「ボールではない。ホールじゃ！」

「(嬉しそうに) なに、動物園？パンダなるものがあるところか？そこも行ってみたいぞ！」

(マイスカイホールの転がる音) [ごろごろごろ。ガッシャーン]

男 「あ、門に激突」

マイスカイホール「(ちょっと怒って)止まってしまったぞ。これ男、我を再び押すのじゃ」

男 「しょうがないなあ、あと1度だけです。それ」

(マイスカイホールの転がる音) [ごろごろ]

マイスカイホール「(ウキウキと)美術館にはどこからはいるのじゃ？」



東京都美術館 × 東京藝術大学

とびらプロジェクト

みんなで作る！とびらくご

<たてもの・野外彫刻 編>

(マイスカイホールの転がる音) [ごろごろごろ]

男 「その階段を下りて」

(マイスカイホールの転がる音) [(少しずつテンポを速めながら) ごろごろごろ
ごろごろごろ ごろごろごろごろ]

(マイスカイホールの転がる音) [どすん ごろごろ どん]

男 「あ、入り口で跳ね返された」

マイスカイホール 「(悲しそうに) 通れぬぞ。我が大きすぎるというのか。[鼻をすする音] 展覧会は見
られぬのじゃな」

「[鼻をすする音] 帰るぞ。男、手を貸せ」

男 「手を貸せって。どうやって上がります？エスカレーターもエレベーターも乗れない
っすよ」

マイスカイホール 「(当たり前のように) 決まっておる。そちが持ち上げるのじゃ」

男 「(あわてたように) いや、それは無理、絶対無理！」

マイスカイホール 「(甘えるように) 言うことを聞かぬと閉じ込めるぞ」

男 「それは嫌だけど、無理、持ち上げるなんて絶対無理」

マイスカイホール 「私の願いを叶えておくれ」

男 「(早口で) 無理無理無理無理無理」

警備員 「(丁寧に) お客様」



東京都美術館 × 東京藝術大学

とびらプロジェクト

みんなで作る！とびらくご

<たてもの・野外彫刻 編>

男 「(早口で)無理無理無理無理無理」

警備員 「(少し大きな声で) お客様！」

男 「(早口で)無理無理無理無理無理無理...」

警備員 「(どなるように) お客様～！！」

男 「(驚いたように)うわ、え、俺ここで寝てたの？(焦った様子で)すみません、すみません。」

「(安心したように)あー夢だったのか。まったく焦ったぜ。動くわけないよな、マイスカイボール」

「さて、帰る前にもう一度マイスカイボールの穴を覗いておくか」

マイスカイホール 「(呆れたように)何度言えばわかる。我の名はマイスカイホールじゃ」

「(甘えながら命令するように)ところで動物園でパンダとやらを見たいのじゃが、もう一度押してくれぬか...」



東京都美術館 × 東京藝術大学

とびらプロジェクト

みんなで作る！とびらくご

<たてもの・野外彫刻 編>

『れんが』 とびら亭はり江 (とびラー7期 井上夏実)

れんががつなく、ちょっと奥手な大学生と美術館女子との淡い恋物語

(男子学生の一人語り)

男 「俺は大学3年生。専攻は古典。授業中はコテン、と寝ちゃってることが多いんだけど。実は、同じゼミにはなちゃんっていう気になってる子がいる。今年はずっとオンライン授業だったんだけど、ようやくリアルではなちゃんと会うことができた」

(男子学生と女子学生の会話)

男 「はなちゃん、LINE 交換しない？」

女 「いいよ～！」

男 「はなちゃんのアイコン…どこの建物だっけ？」

女 「上野公園にある東京都美術館！よく行くんだ～」

男 「ああー、煉瓦の、美術館」

女 「煉瓦に見えるけど…やば、授業始まっちゃう！またね！」

男 「あ、行っちゃったー…」

(男子学生と教授の会話)

教授 「おい」

男 「うわぁびっくりした！教授、脅かさないでよ」

教授 「今、東京都美術館の話をしてたな？ここに次の展覧会のチケットが2枚ある。おまえにやろう。しかし最近の若い子はLINEのやり取り、少しの行き違いですぐブロックされたりするとか…せいぜい頑張れよ」

男 「あ、ありがとうございます。教授、12月にモノくれるって、サンタクロースも兼任してんのか？最近は大学教授も副業の時代か〜。よし、今夜はなちゃんに電話して、デートに誘おう」

(男子学生と女子学生の会話)

男 「はっ、もう夜の9時、そろそろ電話しないと。サンタクロース教授、はなちゃんにOK貰えたら、A+評価お願いします」

電話の音 (ピッピッピ トゥルルルル・・・)

女 「もしもーし」

男 「はなちゃん、突然だけど、日曜空いてる？教授に東京都美術館のチケット、2枚貰ったんだ」

女 「日曜・・・ああごめん、予定が。でも、東京都美術館にはいるよ」

男 「美術館、には、いる？（ここから小声で）はっ、あのサンタ教授、まさかゼミ中にチケット
バラまいて…他のやつに先越されたか？くっそー」

女 「日曜はとびラー、なの」

男 「とび？（ここから小声で）トビって、あの建設現場の？はなちゃんコロナでカフェのバイト
減ったって話してたけど、肉体労働まで始めたのか？あぁいや、落ち着け、俺。授業は切っ
ても電話は切られるな」

（一旦咳ばらいをして、元の大きさの声で）「そっか。はなちゃん」

「それは大事な予定だから仕方ないね。ちなみに、今って何つくってんの？」

女 「来週は、れんがをつくるんだ〜」

男 「れんが？確かに美術館の壁、煉瓦だったな。でも、煉瓦つくるって大変じゃない？」

女 「大変だよ〜。簡単そうで結構難しくて。前の人が作ったものをよーく見ないと、きれいに繋
がらないの」

男 「確かに。一つズレるとそこから曲がって…」

女 「でも、ズレたところから面白い流れになって、想像と全く違うものができることがあるの！
それが、れんがの面白さなんだよね」

男 「想像と全く違うものができちゃっていいの？現場監督、怒らない？」

女 「監督？スタッフさんのことかなあ？むしろ面白がってくれるよ」

男 「なんてクリエイティブなんだ…。はなちゃんすごいな、美術館よく行行って言ってたけど、
まさか建物つくってるなんて」

女 「え？建物つくる？何のこと？ちゃんと私の話聞いてた？」

男 「あれ、怒った？ごめん！日曜は東京都美術館で、壁の煉瓦をつくるバイト。つまりブロック
を積むんじゃないの？」

女 「ええ～ちょっと～れんがってその煉瓦じゃないよ～！私が作るれんがはブロックじゃなくて、連なる歌って書く、連歌！絵を見た感想で他の人と句をつなげ合っていくことで、絵の鑑賞を深めていくの。あと、美術館の壁、煉瓦のブロックに見えるんだけど実はタイル！今度その辺も案内するから、また予定合わせよ！じゃーね、おやすみ～」

電話の音 （ツーツーツ）

男 「あ、切れちゃった。でも、はなちゃん、予定合わせよって言ってたよな。よかったー。
煉瓦とタイル間違えたから、LINE ブロックされるかと思った」



『かいだん』 しゃ鐘 (とびら-7期 三宅慶)

前川國男とそのスタッフが織りなす世にも奇妙な「かいだん」話

前川 「そろそろ東京都美術館も完成だ。おい。弟子の健二を呼べ。健二」

健二 「はい。大将どうされました？」

前川 「この美術館も完成が近い。お前この美術館をどう思う」

健二 「そうですね。まるでアート作品の中にいるようです」

前川 「んー。そうか。どこからそう思う？」

健二 「まずは、作品へのこだわりですかね」

前川 「さすが、健二。わかっているな。建築とは平凡な素材によって、非凡な結果を創出するものだ。ほかに気づいたことはないか」

健二 「ワクワクさせる入口までのアプローチがたまらないですね」

前川 「さすが私の一番弟子だ。他に発見はないか？」

健二 「大将。欲しがりますねー。やはり、なんと言っても人が出会える空間になっていることでしょうか。美術館がまるで一つの都市空間のように演出されていて、人が出会ったり、自由に行き来出来たりする広場ある。どう見てもこの美術館は大将の最高傑作。アート作品だ」

前川 「健二。全て完璧な答えだ。そんなお前に、この美術館の最後の仕上げとして、階段を手掛けて欲しい。名前はもう決めてある。「おむすび階段」だ。狭い空間を有意義に使い、圧迫感を感じない階段を造りたい。この階段は、今までにない、画期的なものになるだろう」

健二 「私が最後の仕上げとして、階段を作るのですか。大将、大変ありがたい話です。ですが、明日からしばらく休ませていただきたいんです」

前川 「どうした。なにかあったのか」



東京都美術館 × 東京藝術大学

とびらプロジェクト

みんなで作る！とびらくご

<たてもの・野外彫刻 編>

健二 「いえ、ちょっと妻とパリへ旅行に」

前川 「パリか。それは仕方ないな。しかし、困った。この階段を誰に頼もう」

健二 「それでしたら、適任がいますよ。新米で真面目すぎるところがありますが、名前を太郎といいます」

前川 「よし。お前が言うならそいつに任せてみよう。おい太郎」

太郎 「へい。大将なんでしょう」

前川 「健二から話は聞いているな。お前に、今までにない、画期的なおむすび階段の工事を頼みたい」

太郎 「今までにない。画期的な。おむすび階段ですか。さすが大将。グルメですね。階段をおむすびにするなんて」

前川 「まーな。とりあえず、この階段は全てお前に任せる。お袋さんのおむすびでも思い出しながら、心をこめて作れ」

太郎 「大将、俺のお袋のおむすびでいいんですか」

前川 「あーそうだ。とびきりのおむすびだ」

太郎 「わかりました。ところで大将、実家はどちらですか」

前川 「新潟だが。それがどうした」

太郎 「いえ。何事も材料が大事だと」

前川 「おー太郎。お前もわかっているじゃないか。じゃーよろしく頼む。ちょっと出張に行ってくる」

太郎 「わかりました」

前川 「太郎戻ったぞ。工事は、階段はどうなってる。しっかりおむすびになっているか」

太郎 「はい。それはおいしそうに」



前川 「おいしそう？ちょっと待て、どう言うことだ。心配だから工事の様子を少し見せてくれ」

太郎 「いえ、大将、まだいけません。お米は炊き立てではなく、少し蒸らした方が美味しくなります」

前川 「それは米の話だろう。俺は階段の話をしている」

太郎 「いえ、米も階段も待つことが大事です」

前川 「なんだと。わかった。お前がそう言うなら、もう少し待とうじゃないか」

前川 「おい太郎。階段はまだか。オープンまであと一ヶ月だぞ」

太郎 「大将。お待たせしました。とうとう完成です」

前川 「おー完成したか。待っていたぞ。では、案内してくれ」

太郎 「あれがおむすび階段です」

前川 「なんか湯気が出てるな。ってお前、なんだこれは」

太郎 「へい。おいしそうでしょう」

前川 「そう言うことじゃない。階段なのに、なんだ、この白くてもちもちした質感は」

太郎 「はい。素材にこだわり、大将の故郷である新潟産コシヒカリを使用しました。あっ、新米です」

前川 「いや聞いてない。確かにお前は新米だが。なんてことだ」

太郎 「え？お気に召しませんでした？」

前川 「おむすび階段とは言ったが。これじゃー腐って使い物にならないだろ」

太郎 「いえ。大丈夫です。日持ちするよう、梅干しをそこら中に散らしてございます。今までになかった画期的な階段でしょう。まさにアートだ」

前川 「そう言うことじゃない」

太郎 「えっ、じゃーごまも追加しちゃいます？」



東京都美術館 × 東京藝術大学

とびらプロジェクト

みんなで作る！とびらくご

<たてもの・野外彫刻 編>

前川 「いやいや。そもそも形が違うだろ。これじゃー、お前、ただの螺旋階段じゃないか。直ぐ三角形に作り直せ」

太郎 「え。うちのお袋のおむすびは丸ですよ」

前川 「お袋のとは言ったが。おむすびといえば三角が定番だろう。それにお前、これ、すでに、錆びてるじゃないか」

太郎 「へー。それは、もちろん塩を塗りましたから」

『武吉の空の穴』 とびら亭わん田あ (とびラー8期 内田淳子)

毎週のように美術館に通うとびラーのまるさんが、
久しぶりに上野にやってきた夫にみせたかったものは…。

---- 東京都美術館正門近くにある野外彫刻マイスカイホールの前

とびラーの丸さん 「あなたと一緒に上野なんて何年ぶりかしら」

丸さんの夫 「昔、お前とゴッホを見たねえ。すごい行列でさ〜」

とびラーの丸さん 「そういえば西洋美術館でゴッホ展あったわね。

確か、大学生の時だったわ。まあね、も〜、何十年前の話よ。

あれ〜、私はあなたと一緒にいったかしら？」

丸さんの夫 「あ、やばい、まずいこと言っちゃったな」

とびラーの丸さん 「ま、いいわ。今日は、私がここ、東京都美術館を案内するわね」

丸さんの夫 「はいはい。去年とびラーになってから、毎週のように通ってるんだから、
そりゃ詳しいよね」

とびラーの丸さん 「まあね。さ、ついたわよ。ねえあなた、あそこにある彫刻の名前知ってる？」

丸さんの夫 「なんだよ、めんどくさいなあ、あの銀色の大きな球のこと？ そうだな
一、『銀色に光る地球』とか、『巨大パチンコ玉の襲撃』かなあ？」

とびラーの丸さん 「巨大パチンコ玉の襲撃ってなんの話〜。東京都美術館の正門前にある芸術
作品が、そんなふざけた名前のわけないでしょ」

丸さんの夫 「ヘエ〜、美術館の外に放ったらかきにされているのかと思ったら、
ちゃんと名前があるんだ」



東京都美術館 × 東京藝術大学

とびらプロジェクト

みんなで作る！とびらくご

<たてもの・野外彫刻 編>

とびラーの丸さん 「これはね、『マイスカイホール 85-2 光と影』といって、もう35年もここにある野外彫刻なのよ」

丸さんの夫 「ふーん、立派な名前じゃない。なんだかさ、ピカピカ光ってまん丸で、御利益がありそうだね。お賽銭でもあげちゃおうかなー」

とびラーの丸さん 「やめてよー、すぐ調子にのるんだから」

丸さんの夫 「おいおい、ちょっと、この球の下の方をみてよ。大きな銀の玉が、落ちこちそうで落ちない、なんだか絶妙なバランスで台の端っこに乗ってますよ〜」

とびラーの丸さん 「あら、あなた、よく気がついたわね。この台はね、この彫刻を作った井上武吉の誕生日に、太陽が作る影の形なの。作品の名前にもあったでしょ、光と影って」

丸さんの夫 「へ〜、芸術家ってなんでも作品にしちゃうんだなあ」

とびラーの丸さん 「武吉の誕生日のね、太陽が一番高い位置にあるお昼ごろ、太陽の影と台の形が重なるの。上にある穴から台の上に、日光がさーっと差し込んで、きれいな光の輪ができるのよ」

丸さんの夫 「お、なんだかすごそうじゃない！ その全部重なって光の輪ができたマイスカイボール、俺もみてみたいな」

とびラーの丸さん 「あら残念、ボールじゃないの。ホールよ。マイスカイホール！」

丸さんの夫 「えー、パチンコ玉だからさ、マイスカイボールなんだと思っていたよ。ホールって、ボタンホールやゴルフホールとか、つまり穴ってことでしょ。なんで玉なのに穴なのよ？」

とびラーの丸さん 「マイスカイホールのことを、井上武吉は、自分が中にもぐって空をのぞく穴だって、言っていたの」

丸さんの夫 「ん？ あの上の方にある穴は、武吉がはいるための穴だったってこと？ あそこから空をのぞいていわけ？」

とびラーの丸さん 「彼はね、ベルリンの町が西と東に分けられていた時代に、そこで5年間をすごしているの」



東京都美術館 × 東京藝術大学

とびらプロジェクト

みんなで作る！とびらくご

<たてもの・野外彫刻 編>

丸さんの夫 「ベルリンの壁の時代だね。なんだかわかるなあ、
武吉は、ベルリンで孤独のあまり、穴に潜りたくなっただな」

とびラーの丸さん 「彼は、日本に帰ってきてからも、この穴をいろいろな形で表現してきたのよ」

丸さんの夫 「ふーん、俺には難しいことはわからないけど、この巨大パチンコ玉を見て
いるとき、真っ青な空や周りのレンガ色の建物が映り込んで、
なんだかここに一つの宇宙があるみたいなんだよな」

とびラーの丸さん 「え、あなた、武吉の孤独だけでなく、宇宙まで感じ取っちゃったの？
武吉はね、「孤独になって 宇宙を知る」って言ってるのよ。
武吉と同じ発想なんて、あなたセンスあるわね！ 見直したわ！」

丸さんの夫 「へへ、俺のこと惚れ直したって？ ま、武吉のことは、俺にまかせてくれ
よ。」

丸さんの夫 「今日はおもしろかったな。また来ような」

とびラーの丸さん 「あなた、ここはまだ、美術館の入り口よ」



東京都美術館 × 東京藝術大学

とびらプロジェクト

みんなで作る！とびらくご

<たてもの・野外彫刻 編>

『建築ツアー』 とびら亭浮らい (とびら9期 石毛正修)

かわいい子供の名前が決まらない。東京都美術館の建築ツアーに参加すると、そこには魅力的な名前の数々が……。

母親 「お前さん、早いとこ、この子の名前考えておくれよ。もうお七夜なんだから！」

父親 「考えてるんだけどよお……かわいい倅の名前だと思うと、これがなかなか……。

よしっ、美術館にでも行って、もういっぺん静かに考えてみるかな。お前も行くか？」

母親 「もちろん行くわよ」

父親 「へえ～、ここが東京都美術館か。なんだか落ち着くじゃねえか。おや、建築ツアーなんてのもやってら。参加できんの？じゃ、ガイドしてもらおう。よろしく頼むよ」

母親 「お前さん、こうやって美術館の建物をじっくり見るってのもいいわね。正門から建物の入り口までの空間が『エスプラナード』って言うんですって」

父親 「おう、なんか格好いいね。外国の俳優の名前みたいだな。うちの倅もそれにしちゃうかな、『山田エスプラナード』。結構いけるんじゃないか」

母親 「ダメ。お前さん、今度はこの壁ですって。ざらざらの。『ハツリ』って言うらしいわよ」

父親 「職人がコンクリートを削ってねえ。そりゃ大変だ。ハツリねえ……、『山田ハツリ』なんてどうだ？悪くはねえかな」

母親 「何よそれ。お前さんもちゃんと聞きましょうよ」

父親 「わかったわかった。それで、壁にうっすらと斜めの線が見えるって。どこだ？」



東京都美術館 × 東京藝術大学

とびらプロジェクト

みんなで作る！とびらくご

<たてもの・野外彫刻 編>

「あ、あれか。あの壁の線を見て・・・、この美術館を設計した前川國男が・・・『アルプスの稜線みたいだね』って？言ったの？本当かよ？思わねえだろ、普通」

母親 「思わないわよねえ」

父親 「いや、ちょっと待てよ『山田アルプス』、これはこれでありか？」

母親 「お前さん、それはアリ」

父親 「おう、お前も乗ってきやがったな。それで、コンクリートの壁についでる鉄の手すりが、トンビの形だって？東京都美術館を略して都美だからトンビって、駄洒落かよ、おい。ちなみに・・・『山田トンビ』？」

母親 「それはナシ！」

父親 「いや、分かってるって。例えばの話だよ」

「ん、何、そっちの建物は・・・、『公募棟』。四つの建物がジグザグに並んでいて、渡り鳥の雁（かり）が群れて飛ぶ様子に似ているから『雁行配置（がんこうはいち）』って言うの？へえ～なるほねえ。『山田雁行』なんつってな。なんだか頑固親父みてえだな」

母親 「お前さんと一緒じゃない」

父親 「今度はこの美術館全体で使われている壁ね。こりゃ俺でもわかるよ、レンガだろう。

えっ、違うの？レンガじゃなくて『打込みタイル』って言うの！へえ～、聞かないとわからないもんだねえ。だとすると、『山田タイル』か。悪くは、ないよね」

母親 「お前さんっ、タイルは悪くないわね。だって山田太一がいるもの。山田タイルがいたっていわよ」

父親 「将来作家にでもなってよ。『不揃いのタイルたち』なんて名作書いちまうんじゃねえかな。参っちまうな」

母親 「お前さん、今度は中に入るわよ。ここがロビーね。天井が丸くて・・・」



東京都美術館 × 東京藝術大学

とびらプロジェクト

みんなで作る！とびらくご

<たてもの・野外彫刻 編>

「あらやだ、かまぼこ天井だって。それで、ぶら下がっている丸い照明も、前川國男の基本デザインだって。可愛らしいわね」

父親 「『山田かまぼこ』・・・これはないよな、流石に。どう？」

母親 「ない！」

父親 「ずんずんずんずん、歩きやがるな。あ、こっち。さっき外から見た公募棟。

四つの部屋にそれぞれイメージカラーがあって、内側から青色、黄色、緑に、一番外が赤色、と」

「それで、はあ、当時の現場監督が『国電の色ですね』なんて言ったら、建築家の前川さんが不満顔した、と。あ、そんなエピソードも教えてくれるんだね、建築ツアーって」

母親 「国電の色なんて言ったらイメージ悪いわよね。ダサイじゃない。

グーグルカラーよね、今だったら」

父親 「ちなみに『山田国電』は？」

母親 「ナイナイナイ」

父親 「『山田不満顔』も？」

母親 「ナイナイナイ。お前さんが馬鹿なこと言ってる間に、もうツアー終わりみたいよ。

次が最後ですって」

父親 「ふーん。最後はらせん階段なんだ。三角形で、真下から見上げると、何かに似てるってよ」

母親 「何かしらねえ。ああ、わかった。おむすびよ。『おむすび階段』ね。

でも・・・、実は・・・、リニューアル後に作られたから、前川國男のデザインではない、ですって」

父親 「い～よ、別に。前川じゃなかったって。面白いんだから。いやあ、ガイドさん、どうもありがとう。楽しませてもらったよ」



東京都美術館 × 東京藝術大学

とびらプロジェクト

みんなで作る！とびらくご

<たてもの・野外彫刻 編>

「建物なんてさ、今まで詳しくみたことなかったけれど、結構見どころがあるもんだね。

それに呼び名がなかなか格好良いじゃねえか」

母親 「それでお前さん、坊やの名前、いいアイデア浮かんだのかい？」

父親 「あ、そうだ。子供の名前つけなきゃいけねえだった。・・・よしっ、決めた。

さっきの名前、みんな並べちまえ！」

と、そんなこんながありました。月日が経つのは早いもの。日本初の公立美術館として、

もうじき100周年を迎える、東京都美術館から名前を頂戴した、めでたい男の子。

すくすくと元気に育って、あっという間に小学生。

入学式の朝には、三軒隣に住む、同じ年の金ちゃんが迎えにきました。

金ちゃん「おはようございます。

『エスプラナード、エスプラナード、ハツリ壁にアルプスの稜線、トンビの手すりに雁行配置、打込みタイルにかまぼこかまぼこ丸型照明、公募棟は青色黄色緑に赤色、国電カラーに前川は不満顔、おむすび階段はリニューアル後』ちゃん、一緒に学校行こう！」

母親 「あら、金ちゃん、おはよう。金ちゃんも今日から小学生ね、おめでとう。迎えにきてくれたんだね。ちょっと待ってて、うちの『エスプラナード、エスプラナード、ハツリ壁にアルプスの稜線、トンビの手すりに雁行配置、打込みタイルにかまぼこかまぼこ丸型照明、公募棟は青色黄色緑に赤色、国電カラーに前川は不満顔、おむすび階段はリニューアル後』ったらまだ寝てるのよ。すぐに起こしてくるから」

「ほら、『エスプラナード、エスプラナード、ハツリ壁にアルプスの稜線、トンビの手すりに雁行配置、打込みタイルにかまぼこかまぼこ丸型照明、公募棟は青色黄色緑に赤色、国電カラ



東京都美術館 × 東京藝術大学

とびらプロジェクト

みんなで作る！とびらくご

<たてもの・野外彫刻 編>

一に前川は不満顔、おむすび階段はリニューアル後』金ちゃんが迎えにきてくれたわよ。いつまでも寝てないでさっさと起きなさい」

「ちょっとお前さん、お前さんも起こしてよ」

父親 「なんだなんだ！金ちゃんが迎えにきてくれてるのに、」

『エスプラナード、エスプラナード、ハツリ壁にアルプスの稜線、トンビの手すりに雁行配置、打込みタイルにかまぼこかまぼこ丸型照明、公募棟は青色黄色緑に赤色、国電カラーに前川は不満顔、おむすび階段はリニューアル後』のやつがまだ寝てるだと！」

「やいやいやい、『エスプラナード、エスプラナード、ハツリ壁にアルプスの稜線、トンビの手すりに雁行配置、打込みタイルにかまぼこかまぼこ丸型照明、公募棟は青色黄色緑に赤色、国電カラーに前川は不満顔、おむすび階段はリニューアル後』さっさと起きやがれ！金ちゃんと一緒に入学式行こうって迎えにきてくれてるんだ！」

「お〜い金ちゃん、もうちょっとだけ待ってくれえ」

金ちゃん「おじちゃん、卒業式になっちゃった」



東京都美術館 × 東京藝術大学

とびらプロジェクト

みんなで作る！とびらくご

<たてもの・野外彫刻 編>

『上野検索』 とびら亭あらいはり（とびラー9期滝沢智恵子）

初上京の母親と、母親に上野、東京都美術館を案内してあげるとびラーの息子の会話。

久しぶりに会った母親は…？

息子 「かあちゃん初めての東京だけど、上野まで、無事に来れるかなあ」

「あ！ 来た来た！かあちゃん、ここ、ここ！迷子にならなかったあ？」

母 「ああ！久しぶりだねえ。お前元気そうだねえ。」

「迷子になんかなるわけではないよ。スマホっていうのはお前より頼りになるんだよ」

息子 「なんだよ。ひどいなあ。でもスマホ使いこなしてんだ。すごいじゃないか。

母ちゃん」

母 「そうだろう？任せておくれ！あ～。ここが有名な上野かい！」

「そうだ、お前、知ってるかい？ここは寛永寺（かんえいじ）の伽藍（がらん）の焼け跡に建設されたんだよ」

息子 「母ちゃん、よく知ってるなあ。なんで知ってるの？」

母 「スマホでググって調べて来たんだよ。なんでも聞いとくれ」

息子 「参ったなあ、全く…。ググるとかいう言葉まで使えるようになったのか。おちおち適当なこと言えないなあ」

「あ、ほらほら母ちゃん！あれが大人気のパンダのいる動物園だよ」

母 「パンダちゃん！ あ～、見た～い。可愛いよねえ」

「母ちゃんもパンダちゃんの真似して食べてゴロゴロしてみてるんだけど、全然可愛くならなくてねえ。何が違うんだろう？」

息子 「いやいや、、母ちゃんそれは無駄な努力かと」

「それより、ほら、今日はこっち。これが今日行こうと思っていた、東京都美術館」

母 「はい！ここもお前より知ってるよ」

「石炭商 佐藤慶太郎の寄付金をもとに、大正15年、日本初の公立美術館『東京府美術館』として開館。設計は岡田信一郎」

「えっと、まだ読むかい？」

息子 「あ、いやいや、その辺で大丈夫。スマホが得意なのはよく解ったよ。えらい、えらい」

母 「ほら、お前、なんてったってこのスマホ5G（ゴージャ）だからね！」

息子 「5G? ああ、ファイブジーのことか。なんだい、すごいのもってるな」

「それより、実はさ、俺ここで「とびラー」っていうのやってんだ」

「『とびラー』ってのはアートコミュニケーターっていったって

美術館を拠点にアートを介して誰もがフラットに参加できる対話の場をデザインする活動なんだよ」

母 「あ、それも知ってるよ！トビラーとは、東京都美術館の「とび」と、「新しい扉を開く」の意味が含まれた愛称。任期は3年間で」

息子 「かあちゃん、ググるの早いなあ」

母 「ふふ～ん、なんてったって、実はこれ、6G（ロクジー）なんです」

息子 「6G? おっと、それはまだ開発されてないんだよ。残念、母ちゃん」

「あ、そういえば、母ちゃん、『前川國男』は知ってる？」

母 「やだ～。当たり前じゃないか～。この建物を建てた人だろう？」

「母ちゃん好みなカッコいいダンディなおじさまだよ～」

息子 「ああ、なんかわかってるみたいだから安心した」

「さ、中に入るよ。ここでは母ちゃんの大好きな前川さんの作ったものが沢山みられるよ。色々な部屋があるだろ？ 美術の展示とかをここでやるんだ」

「椅子の色とか壁の色とかもこだわってるし、壁の作りや柱の形だって『美』を追求してるんだぜ。各階で色んなこだわりの“美”が見れるんだ」

母 「お！さすが、とびラー！ スマホより凄いじゃないか！」

「ねえ。この階段は随分と面白い形をしてるんだねえ。三角がくるくるして上の方まで繋がってるのかい？」

息子 「うん、一番上の階のレストランまで繋がってるんだ」

「そのレストランからの景色もすごく綺麗だね。ほら、前川さん食にもこだわりがあったから、レストランも大切なポイントにしてるんだ」

「だからレストランも“美”なんだ」

母 「へえ～、なるほどねえ。じゃ、この階段って、下から上の階までの“美”を結んでる訳だねえ。美を結ぶ階段」

「びをむすぶ階段・・・びをむすぶ・・・びをむすび、びをむすび、びをむすびをむすびをむすび、おむすび」

「これは「おむすび階段」」

息子 「おお、なんだい、母ちゃん随分上手いこと言うねえ。それも5G（ゴージャ）やら6G（ロクジー）とやらで調べたの？」

母 「だからずっと言ってるだろう？母ちゃんは語呂（ごーろー）を使いこなすプロなんだよ！」

コロナ倒産で世をはかなむ男が守衛さんから不思議マスクをもらったら…出た～見えた～

僕 「なんやろ、このキューンとせつの～うなる不安な気持ち。もう、ころっとあの世にでもいきたい。いく前に元気なころっとしたパンダでも見とこか～と思てやな動物園来たら、えっ、臨時休業・はいれへん？おまけにパンダ中国帰るの延期したて??」「僕も関西に返還されたいわ～～。で、隣のこっちの煉瓦色したスカーツとした建物。見たことあるで～。若い頃お母ちゃんとデートに来たことがある東京都美術館ちゃうの～。」

「入り口入ってすぐに、あったわ、これ。ころんとして、ピカッとした、巨大な銀の玉。この前でホッソリ映るお母ちゃんの写真とったの覚えてるわ。」

「ほーお、銀の玉の上の方に大きい穴があるやんー。この穴に頭突っ込んで、ひと思いにころんと人生おわたるろかいな～」

守衛 「はーい、そこの関西弁でブツブツいってるクラ～い人、白線までお下がりくださいよ～。触っちゃいけないの。」

「どうされました？肩おとして？ え？あの穴に入りたいって？そりゃ困るなあ。作品が傷ついたりするからさ～」

僕 「あんなあ、美術館の守衛さんやろ？僕のこと心配せんと、銀の玉の心配かいな？」

守衛 「はーい、マスクしましょうー」

僕 「持ってへんよマスク。これから鼻かんで、世をはかなもういうのにマスクいらへんし。」

「僕はな、今、コロナ禍で倒産して、借金苦なんよ。けど娘は芸大受験するいうし、お母ちゃんは『私立の美大は無理やで。高いで』言うしな、も、倒産はどうにもならへん～」

守衛 「こりゃとんだ父さんだねえ。しかし、おまえさんなんだ、暗さの中に変な明るさがあるねえ」



「仕方ないねえ。とりあえず、この特製マスクをあげるから、まあ、野外彫刻の鑑賞でもしてくかい？ あの世の彫刻家の先生方に会えるからさ」

僕 「ほな世をはかなみつつマスクしマスク。オヤジギャク〜と、なんや？マスクした途端にパ〜と視界が明る〜なった、うわあ〜あの銀の玉の上の方の僕が気にいった穴にスルスル〜とおっちゃん入ってっただ。」

「あれ〜銀の玉の裏の方にも小っちゃい穴発見！出口があったわー。ニョロ〜とおっちゃんが出てきはったわ。こら、本格的なおばけの技や。おばけみえてますがな〜僕」

守衛 「この作品を作りなすった井上ブキチ先生が歓迎なさっているんですよ。『マイスカイホール85-2 光と影』って作品。66歳で亡くなって、生きてりゃいくつかねえ。あんたはいくつだい？」

僕 「もう、いえ、やっと50です。娘は18。守衛さんも見えます？向こうの細長い石のベンチに座ってる女子校生、うちの娘とおなじ位の歳やなあ」

守衛 「はーい、そこのお嬢さん、そこね、ベンチじゃなくて作品なんです〜。お座りなさらず、白線まで下がってくださいね〜」

「保田春彦先生の花崗岩の彫刻ですよ。ゴホンと咳して、「堰の見える遠景」なんて作品なんですよ」

僕 「やっぱり咳も見えるんかいな！けどあそこの細長い石、作品やったの？髭の濃いおじいちゃんが座って、手招きしてはるわ。2人目のおばけ見えてるやん。壊れたメガネをガムテープで巻いて、汚い作業着で。そのくせ女子高生にはニコニコして」

「・・・え、おたくさんが作者の方？はい、実はうちにも娘がおりまして」

「えっ、保田先生にもお嬢さんがいらっしゃる？へーえ、パリに留学したときに、恋に落ちて奥様とのお子さん？ほら、べっぴんさんやろなあ。。」

「うちのは、顔は雑に可愛いんやけどね〜、絵がものすごく大好きで、芸大に行きたいって申しまして。ええっ〜、先生のお嬢さんのエリーザさんも芸大生？それドやったら入れるんですかねえ〜！



東京都美術館 × 東京藝術大学

とびらプロジェクト

みんなで作る！とびらくご

<たてもの・野外彫刻 編>

守衛 「はい、そこの激しく独り言の人、作品に座んないの。白線までお下がりくださいよ。え、話し中？・・例のおばけ先生に？良く会話がなりたってんねー？」

俺 「はい、今ええ話聴いてるんでわ～。保田先生の師匠の、ザッキンていう」

守衛 「なに、ザッキン？消毒液いるかい？」

俺 「ちがうて。オシップ・ザッキン言うフランスの彫刻家の先生のやなあ、若い頃の苦労話、聞かせてもろてたんですわ。」

「そしたら僕の倒産とか境遇とか、あまりにもお粗末でびゅ～と吹き飛んでしもたわ。僕は娘のためにも、父親らしく毎日上機嫌で、どーんとしてればええっていうてくれはってん。ほんまやなあ～、ううううう。ちーん」

守衛 「あああ、マスクではなかんじまってるよ。。おーい、どこいくんだい。ころっと元気になっちゃって。野外彫刻は、まだこっちにもあるんだよ、ハ、ハ、ハックション」

俺 「白線までおさがりください！やろ。わかってますう～。守衛さん、おおきに～」



東京都美術館 × 東京藝術大学

とびらプロジェクト

みんなで作る！とびらくご

<たてもの・野外彫刻 編>

『クマと平太の上野日記』 とびら亭いぶ志吟 (とびラー7期 園田二郎)

コロナでゴロゴロしていたクマゴロウと息子の平太が都美に来た
驚いて楽しんだ一日とは

近頃はコロナっていうのが流行っていて、どこの家庭もストレスで爆発寸前です。

クマゴロウのうちもご多分にもれません。

クマゴロウ「かかあの野郎。いいたいこと、いいやがって。何で自分ちでゴロゴロしちゃあいけねえんだ。とうがたった女はいやだねえ。かさにかかって、『たまには平太を連れてどっか行っておやりよ』ときた。上野のトンビがいいよって、行き先まで決められ、追い出されちゃった」。

平太 「おっとう、トンビじゃなくて、トビ。東京都美術館のことをいうんだよ」

と、言い合っているうちに、

(ウエノー、ウエノー)

クマゴロウ 「平太、着いたぞー」

平太 「おっきな駅だなあ。あれえ、おっとう、石碑の前で固まっちゃったよ。ブツブツ、何かいっているよ」

クマゴロウ 「どこかに 故郷の 香りをのーせーて

入る列車の なつかしさ

上野は俺らの 心の駅だ

くじけちゃならない 人生が

あの日 ここから 始まった」



東京都美術館 × 東京藝術大学

とびらプロジェクト

みんなで作る！とびらくご

<たてもの・野外彫刻 編>

平太 「おっとう、泣いているの」

クマゴロウ 「この歌はなあ、田舎から東京に来た人の応援歌よ。お前のひいじいちゃんも、この歌にはげまされたんだ」

平太 「大人は涙もろいからいやだよ。早く、行こうー」

クマゴロウ 「着いたぞー。なあんだ、トンビ色の建物が並んでいるじゃないか。やっぱりトンビだ。入るぞ。入口はエスカレーターで降りた地下だってよ」

平太 「わかったあ。このエスカレーター、すごいなあ。地下の秘密基地へ真っ逆さまに落ちていくみたい。広場に着いたよ」

「窓のガラスに、景色や建物が映ってる。きれいだなあ。空もすっごく広いよ。きらきら光りながら鳥の群れが飛んで行った」

クマゴロウ 「平太、平太ー。なに寄り道してるんだよ。このドアから中へ入るぞー。駆けるなって。先にはいっちゃったよ」

平太 「おっとう、おっとう。来てー、来てー。この階段はおむすび階段。ほら、下から見ると、三角形でおむすびみたいだろ」

「こちらがかまぼこ天井。照明の灯りも柔らかい光でしょ。」

クマゴロウ 「おい、おい。何か変だぞ。なんで、そんなに、いろいろ知ってるんだ。平太。白状しろ。ぶんなぐるぞ」

平太 「どうしようかなあ。おっかあに口止めされてるんだけど、まあいいか。

この間、学校見学があったんだ。『また、行きたい』って、おっかあに頼んでたんだ。

ごめんなさい」

クマゴロウ 「かかあまでぐるになって、たぶらかそうとしたってえのか。

でもな。勉強した平太を怒るわけにもいかねえなあ。あーれ、平太のやつ、どんどん奥へいっちゃったぞ。ここは、いろんな展覧会、やっているんだなあ」

クマゴロウ 「えっ、もうこんな時間か。そろそろ帰ろう。おっとう、くったくただ」



東京都美術館 × 東京藝術大学

とびらプロジェクト

みんなで作る！とびらくご

<たてもの・野外彫刻 編>

平太 「おいら、外の入り口のパチンコ玉のお化けのところへ行っいいい」

クマゴロウ 「行っちゃったよ。おいらはこの椅子で休もうか。どっこいしょ」

「平太のやつ、何してるんだろうね。まだお化けパチンコ玉とにらめっこしたり、周りをぐるぐる歩きまわったりしているよ。目を回して倒れちゃったら面白いのになあ」

「今度は、しゃがんでらあ。何見てるんだ」

クマゴロウ 「平太、平太、平こ。もう帰るぞ。おやっ。しゃがんだまま寝っちゃってるよ。馬鹿(ばっか)だねえ。よおし、おぶってやるよ。ヨッコラッショっと。重くなったなあ」

「今日は、ちとは、親らしいことをしたかなあ」

「エーエー。カモメが一羽、飛んできたぜ。上野の山にカモメか。おっどろいたなあ」

平太 「おっとう」

クマゴロウ 「起きてたのか」

平太 「あれは、本で読んだ『カモメのジョナサン』だよ。群れから離れて飛行方法を覚え、すごい飛び方ができるカモメなんだって。おいらも、飛びたいなあ」

クマゴロウ 「おめえ、何でもよくしっているなあ。トンビの子はやはりトンビと思っていたけど、カモメが生まれちゃったのかもな」

「でも、トンビとカモメいったい、どっちがえれえのだろう」

クマゴロウ 「夕暮れかあ。トンビの建物が、赤、青、黄、緑に輝いているぜ。おっとうも、また来たくなっちゃったなあ」



『上野の森』 とびら亭ちいママ (とびらー8期 藤田理子)

上野の森に住むたぬきと美術館の警備員たちとのある夜の出来事

上野の森にほど近い、東京藝術大学の裏手にたぬ吉という若いたぬきが住んでいる

たぬ吉 「あー寒い。今年の秋はいつになく冷える。夏あたりは公園も動物園も静かで過ごしやすかったのになぁ。最近パンダんとこのチビが人気で朝から毎日すごい人だ。のんびり朝ごはんの散策もできない」

とたぬ吉はぼやいていた。

たぬ吉 「しかも、なんだな、急に冬がきたんでなんの支度もできてないよ。どこか過ごしやすいいところはないか・・・」

「ん？そういや、ここ最近この東京都美術館もなんだか静かな気がするなぁ。たまにJKやら子どもたちが彫刻の周りをウロウロして何かを考えたり話したりしているくらいだ」

「去年なんて、シルバーデーとかいう日があると、わんさか町のご隠居たちが押し寄せてきて賑やかだったけど、今年は静かだもんな」

と冬の寒さをしのぐ場所を探していた。

何か思いついたようにたぬ吉はポンと手をたたき

たぬ吉 「よし！決めた。今年の冬はこちらにおじゃましよう」

と走り出した。



東京都美術館 × 東京藝術大学
とびらプロジェクト
みんなで作る！とびらくご
〈たてもの・野外彫刻 編〉

たぬ吉は、まん丸い球の穴をスーッと滑り、階段をトントントンと降りて、

いっぱいある柱の横を抜け傘立ての後ろから入口の様子をそっと見る。

たぬ吉 「ありやりや、人が立っているぞ。よし、さきほど大きなイチョウの樹からいただいた葉っぱを乗せて、どろん！」

見事に監視員に化けたたぬ吉は

たぬ吉 「おつかれさまです〜」

と館内へ。

書道展と書かれた展示室に入っていく。

たぬ吉 「こりゃいい、あったかいぞ。まもなく閉館となるし、今夜はここで過ごそう。せっかくだ、掛け軸の文字に化けよう。どろん！」

たぬ吉は掛け軸に化けてぬくぬくとしておりました。

さて夜も更けたころ、なにやら声が聞こえてまいりました。

先輩警備員 「いいか新人！この扉が閉まっているか確認すること」

新人警備員 「は、はい この扉ですね（カキカキメモとる仕草）・・・せんばい、それにしても夜の美術館ってちょっと怖いですよ」



東京都美術館 × 東京藝術大学

とびらプロジェクト

みんなで作る！とびらくご

<たてもの・野外彫刻 編>

先輩警備員 「うむ。最近こそは聞かなくなったが、昔はよく近所のためぎが入り込んで美術品に化けて夜を過ごしていたそうぞ」

新人警備員 「ええええ！ためぎ？いやだなあ、ボク。平成生まれなんでそういう昔話的な馴染みがないですよ」

先輩警備員 「そりゃ、ためぎの方だって出会いたくないさ。まー最近のためぎもそうそう化けたりせず、野良猫たちと裏の門あたりでのんびり暮らしているさ」

新人警備員 「だったらいいんですけどね。嫌ですよ、出てきたらボクやめちゃいますから」

先輩警備員 「なんだ、なんだ、入ってきたばかりで辞めるとは。大丈夫だからちゃんと見まわって」

二人は展示されている書に懐中電灯を当てた。

先輩警備員 「特に異変はないな、よし次にいくぞ」

新人警備員 「せんばい、ちょっと待ってください。この字ってなんて読むんでしたっけ？」

先輩警備員 「うーん、それは数字の千にふる里の里とそれに眼と書いて千里眼と読む」

新人警備員 「なるほど。さすがですね、せんばい。じゃ、これは？」

先輩警備員 「これは 惚れて通えば千里も一里。惚れた相手に会いに行く時は、どんな遠い道のりも近く思えて苦にはならないという意味だ」

二人は字を読みながら、じょじょにため吉が化けた掛け軸へと近づいてくる。

掛け軸の文字に化けたため吉は気が気ではない。



たぬ吉 「まずいまずいぞ、でもおいら、化けるのには自信があるんだ。バレるわけがない」

と、たぬ吉はピシッとしゃばに力を入れて息をひそめた。

とうとう二人はたぬ吉の掛け軸前に立った。

新人警備員 「せんばい、これだけなんだか字の雰囲気違いますよね。なんて読むんですかね？縁あれば千、千、千狸?!」

先輩警備員 「これはな、縁あれば千里と言うんだ。縁があれば千里も離れた所の人と会うこともあるし、結ばれることもあるということ。『縁あれば千里を隔てても会い易し、縁なければ面を対しても見え難し』を略した言葉だよ。千という字に里と書いて千里で狸という字じゃ・・・あ!」

心の声 (この字は上野のたぬ公が化けているな、里という字に獣へんが付いたんで縁あれば千狸なんてわけのわからない言葉になっているんだ。しかし、うまいこと化けたもんだ。今夜は寒いし、このままそっとしてやろう)

声に出して 「いいか、新人!これはな、狸と書いて「り」とも読むんだ。美術館というところは、なかなか来れない人にも作品を通して心を通じ合わせて出合いをみつけてくれる場所って意味なんだ。人間だって狸だってここ上野で出会えるんだよ」

